

## 87. 滋賀県下の古墳出土鏡について(2)

### 野洲郡・守山市の古鏡

#### 1. 大岩山古墳出土鏡

野洲町小篠原の大岩山で大正10年春砂防工事中に見された古墳である。この古墳については、梅原末治氏「近江国野洲郡小篠原大岩山の古墳調査報告」(考古学雑誌12-1)に詳細が報告され、滋賀県史・野洲郡史・概要等でも述べられている。野洲郡史では大岩山第二番山林古墳なる名称で呼ばれている。なお、丸山竜平氏「古墳と古墳群□中」(日本史論叢7)では、大岩山のこの古墳を大岩山第二番山林古墳、従来天王山古墳と称されてきた古墳を大岩山古墳、天王山古墳として別の古墳を称している。梅原氏の「近江野洲郡小篠原に於ける二三の古墳に就て」(人類学雑誌31-7)に「この両者の西方に當り天王山と俗称されつつある塚の如きは……」と述べられているものが、丸山氏の天王山古墳に当るのかもしれない。ただしここでは読者の便宜のために一応これまでの呼称に従っておく。この古墳からは古鏡が5面出土しているが、1面は小片のためほとんど研究の対象になっていないようである。その5面とは、梅原氏の論文によれば、「獸縁紋尚方盤龍四神鏡・三角縁盤龍画像帶鏡・三角縁陳氏作神獸鏡・三角縁日月天王神獸鏡・平縁の銅鏡破片」である。前四鏡は現在東京国立博物館に所蔵されている。以下にこれらについて概説するが、順序は上述の鏡の順による。

1は資料館の図録では獸帶鏡とされているもので、径23cm舶載鏡である。銘は梅原氏の論文では「□工刻之成文章 白虎壁邪居中央 壽金如石佳自好 上有山人不老兮」と読まれ、欠失している部分は他により「尚方作竟大毋傷 巧」と推定されている。後藤守一氏の「漢式鏡」では鏡名に(獸帶鏡)と付記されている。2は資料館図録では龍虎鏡とされている径24.5cmの舶載鏡である。銘は無い。小林行雄氏「三角縁神獸鏡の研究」(古墳文化論考所収)で獸文帶竜虎鏡として、岡山車塚鏡・奈良丸山鏡・群馬北山鏡との同范関係が述べられ、樋口隆康氏も「古鏡」で論及してお

られる。3は二神三獸車馬鏡で径25.7cm舶載鏡である。銘は梅原氏によれば「鏡陳氏作倭大工 荆募周取用青銅 君宜高官至海東 保子宜孫」で「作」の次の異体文字は「甚」であろうとされ、「取」は欠割して不明であり、最初の「鏡」は「作」の次に来るべきであることを指摘されている。後藤守一氏の「古鏡聚英」では「荆募周圀」とされ、西田守夫氏「三角縁神獸鏡の形式系譜緒説」(東京国立博物館紀要第6号)では「鏡陳氏作甚大工 型模周□用青銅 君宜高官至海東」とされている。(最後の「保子宜孫」が落ちている)なお余談であるが、この「至海東」が問題となっていることを付け加えておこう。4は神獸鏡(神像部分の欠失が大きく正しい神像数不明)で径は21.3cmあり舶載鏡である。銘帯の方格内に「日月天王」の四字を一字宛現すとされているが、欠失部分があるので四字のうち二字だけが見られる。この鏡に関しては小林行雄氏が帝塚山大学考古学談話会の第200回記念講演会の講演要旨の付表で大阪横山鏡との同范関係を示しておられる。この4面はすべて「漢式鏡」にも収載されている。最後に梅原氏の報文に「猶今一個平縁の銅鏡の破片あり。現存せるは僅に縁部の一小破片に過ぎず、従って内区の文様等全く不明なるも、大きさを復原するに径四寸六分(メートルに換算して約14cm)……」として、これを仿製鏡と推定されているものがあるが、これは所在不明である。

#### 2. 野洲町天王山古墳出土鏡

野洲町小篠原の大岩山にある古墳群中の一つで、従来天王山あるいは天皇の瓦甍などと称されてきた古墳の出土鏡で、明治7年3月偶然発見されたものである。この古墳の名称に関しては大岩山古墳で述べたように丸山竜平氏の論述があるが、ここでは従来の名称に従っておく。発見の古鏡は3面と述べられた文書もあるが、梅原末治氏「粟太野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告2」(考古学雑誌12-3)に考証してもらえるように現存するものは2面である。いずれも仿製鏡で、径26.5cmの画像鏡と径21.8cmの三神三獸鏡である。画像鏡には擬銘帯がある。現在知恩院の所蔵で京都国立博物館に保管されている。古墳の構造や伴出遺物については前述の梅原氏の論考に譲って、ここでは再説しない。ところが、画像鏡の表面に写真のような痕が見られ、この大きさが他の三神三獸鏡と完全に



画像鏡表面の鏡痕

一致するのである。従ってこの両鏡は鏡面を重ねて副葬されていたことが考えられる。最初からずれていたか、最初は重なっていたが土圧でずれたかは不明であるが、三神三獸鏡の表面にも、画像鏡のようにはっきりはしないが、やや銹化の跡のはげしい部分が

あり、恐らくこの面で重なっていたのであろう。もしそうだとすると、梅原氏の論文の中で述べられている井狩増次郎氏の発見に関する談話の中に、山遊びに行った生徒が最初二片に割れた大鏡を見つけ、その下方から完全な古鏡を見つけたが、この鏡は鈕を上にしていたと記憶するように話されている点と鏡の示すところが齟齬するようである。即ち二鏡は鏡面を重ねていたのであるから、当然下の方で発見された三神三獸鏡は鏡面を上にしていなければならない。ところが談話では下の鏡が鏡背を上していることとなる。この点に疑問が残るのである。この2面の鏡については富岡謙蔵氏「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所取）に収載され、後藤守一氏「漢式鏡」でも梅原氏の論を引いて述べられている。小林行雄氏の「仿製三角縁神獸鏡の研究」（古墳文化論考所取）では、三神三獸鏡に関して佐賀谷口、大阪焼山、愛知天王山各古墳出土鏡や関信太郎氏旧蔵鏡との同范について述べられ、樋口隆康氏「古鏡」においては両鏡とも収載されている。また、田中琢氏「鐸・劍・鏡」（日本原始美術大系4）同氏「古鏡」（日本の原始美術8）に画像鏡が収載されている。

### 3. 山川七左衛門氏旧蔵鏡その一

「梅仙居蔵古鏡図集」に収載され、梅原末治氏によって解説されている2面の古鏡で、特に1面の鏡面に魚形佩金具の一部が付着し、爾余の部分も銹となって遺存していることで注目されたものである。梅原氏の説明によれば「明治31年近江野洲郡三上山下の古墳にて次に載する同じ式の鏡と共に発見せりと伝ふるもの」とあり、その次に載せる同式の鏡の説明においても、「前葉の鏡と同じく近江野洲郡三上山下の古墳出土と云ひ、其の構図を等しくするのみならず、銹化の度合色彩に至るまで全く一致せるは、両者が同所に存在せるを示すもの」と論ぜられている。また両鏡の遺存状況を推考され「而して面に大形鏡を重ねたる如き痕を遺存するより見れば、前者と接觸して埋葬せられたりしか」とのべられている。共に平縁細線式獸帯鏡とされ、鏡背の文様について観察されているので、その詳細は古鏡図集の梅原氏の解説に譲って再説しない。鏡の大きさはほとんど同じであるが、わずかに大小があ

る。即ち一は径7寸6分他は7寸4分で約23cmと22.4cmとなる。銘については大鏡の説明で鈕をめぐる9個の乳間に「宜□□」の銘があり、また銘帯もあるが「但し二番型の為に文様頗る朦朧にして今ま銘文全く読むべからず」と述べている。もちろん筆者はその図集の写真を見るだけであるのでそれ以上を加えることはできない。なお梅原氏の「日本出土の中国の古鏡」（考古学雑誌47-4）ではこの2面についてそれがふみかえし（再版物）とする公算の大であることを述べられている。この鏡に関しては樋口隆康氏「武寧王陵出土鏡と七子鏡」（史林55-4）において、大韓民国忠清南道公州の武寧王陵出土鏡、群馬県観音山古墳出土鏡との同型関係について述べられていることは注意すべきことである。この論文や「古鏡」では細線式獸帯鏡でなく、唐草文縁薄肉刻七獸鏡あるいは半肉彫獸帯鏡とされ、「古鏡」では舶載の後漢式鏡に分類されている。また、野洲郡史・概要にも論及されており、後藤守一氏「漢式鏡」でも「梅仙居蔵古鏡図集」の説を引用されている。小林行雄氏も帝塚山大学の記念講演会の要旨付表の第2表で「中国鏡とその踏み返し鏡との分布」でこの鏡にふれておられる。山川氏の収蔵品は今日他に渡っているとの由で、筆者の力では追跡することができず、識者の教示を得たいと思っている。

### 4. 山川七左衛門氏旧蔵鏡その二

梅原末治氏「日本出土の中国の古鏡」（考古学雑誌47-4）の内行花文鏡類の項で「畿内以東では滋賀県野洲郡三上山麓地帯から出土したと言う遺品（径20.6cm）が故山川七左衛門氏の蒐集品中にあった」との記述があるが、現物は勿論写真等もなく、前項で述べた如く山川氏の収蔵品の行方が判明しないので不明である。従ってここではただ梅原氏の記述のあることだけを述べておく。

### 5. 饗庭綱氏所蔵鏡

常喜愛氏の旧蔵品で、現在饗庭綱氏の所蔵となり県立琵琶湖文化館に保管されている。野洲町出土と伝えられているが、出土地や発見年月、伴出遺物等一切不明である。仿製の乳文鏡で径11.2cmを計る。樋口隆康氏「古鏡」に収載されている。

### 6. 中主町兵主大社所蔵鏡

現在兵主大社の宝庫に所蔵されているが、出土地は野洲町付近との伝があるだけで詳細は何もわからない。従って伴出遺物も不明である。仿製の四神四獸鏡で径15.3cmを計る。発見の年月についても不明であるが、あるいは大正年間か昭和初年とも思われる。

### 7. 野洲町大塚山南遺跡出土鏡

これは滋賀県遺跡目録に野洲町辻町の大塚山南遺跡として前方後円墳1基をあげ、出土遺物として古鏡が記録されているものである。他に記録を見ず、その詳



細は不明である。あるいは兵主大社所蔵鏡がそれなのかもしれないが、これも根拠のない推測である。目録における記録者がわかれば教示を得たいが、とりあえずここに記して後考をまつ。

## 8. 野洲町古富波山古墳出土鏡

野洲町富波にあった古墳で、明治29年に開墾中古鏡3面を発見している。現在は古墳の面影は全然見られない。従来富波古墳と呼ばれている場合が多いが、当時この古墳を地元では古富波山と称していたところから、小林行雄氏の「三角縁神獸鏡の研究」（古墳文化論考所収）や樋口隆康氏の「古鏡」では古富波山古墳とされ、丸山竜平氏ほかの「野洲郡野洲町富波遺跡調査報告」（昭和48年度滋賀県文化財調査年報）においてもこの名称が用いられている。3面の古鏡はそれぞれ所蔵者を異にし、四神二獸鏡は東京国立博物館、四神四獸鏡はドイツのベルリン国立土俗博物館、三神五獸鏡は地元竹内正信氏（県立琵琶湖文化館保管）の所蔵となっている。3面とも舶載鏡で、径は四神二獸鏡が21.8cm、四神四獸鏡が21.9cm、三神五獸鏡が22cmである。この古墳に関しては梅原末治氏の「栗太野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告」（考古学雑誌12-2）の「野洲郡祇王村富波の古墳」の項に調査の詳細が報告されている。また、滋賀県史・野洲郡史・概要にも述べられ、最近では前述の丸山竜平氏等の報告においても論及されている。以下に鏡に関してのみ二三述べることにする。

まず東京国立博物館の四神二獸鏡であるが、梅原氏の前記報告では陳氏作四神二獸鏡となっている。この四神二獸鏡なる名称は、富岡謙蔵氏の「再び日本出土の支那古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）をはじめ、小林行雄氏や樋口隆康氏の前掲論著はすべてこの名称である。しかし、後藤守一氏の「漢式鏡」や「古鏡聚英」では二神二獸鏡となっている。これは西田守夫氏「三角縁神獸鏡の形式系譜緒説」（東京国立博物館紀要第6号）において「滋賀県富波古墳出土鏡にはそれぞれ脇侍のいる東王（父脱か）と西王母及び二獸の全身のほか」と述べられているように、二神及びその脇侍とする考えにもとづくのであろう。この鏡には「陳氏作竟甚大好 上有戲守及龍虎 身有文章口銜巨 古有聖人王父母 渴飲玉泉園食漿」なる銘文があり、獸尾の先に「虎」の字がある。この銘文は西田守夫氏の論文に依ったのであるが、梅原氏の論文では「戲」を「越？」とされ、「守」の次の二字は「破損の為不詳」として、その後の字は「龍」と推定され、また「虎」は「虜」と印刷されている。さらに「泉」の次の文字は「飢」であるとされている。「漢式鏡」や概要で、この銘文中の「上有」以下を「上有越守左龍右虎」としているが、この「左龍右虎」はこのような銘文の多

いところからの誤りと思われる。

次に在ベルリンの四神四獸鏡については、高橋健自氏「王莽時代の鏡に就いて」（考古学雑誌9-12）で論述され、梅原末治氏の「欧米蒐儲支那古銅精華 鏡鑑部二」に記載されている。また小林行雄氏の前記論文にその同範鏡として、福岡市老司古墳鏡、フリア美術館所蔵鏡が挙げられている。樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。銘文は高橋氏の前記論文に「王氏作竟甚大好 同出徐州刻鏤成 師子辟邪□□□ □□□坐中□ 取者大吉樂未央」と読まれ、梅原氏もこれに従っておられる。なお「欧米蒐儲支那古銅精華」では、この不明の文字に対し「國國國 國國國坐中國」と推定されている。これと同範と目されるフリア美術館蔵鏡の銘文の最初は「王氏作竟甚大明」で「甚大好」ではない。フリア鏡は写真が鮮明で「明」であることは明白であるが、ベルリン鏡の方は明白でないため、写真で確かめることはできない。なお、この鏡が大津市瀬田織部山鏡と共に梅原末治氏が「所謂王莽鏡に就いての疑問」（考古学雑誌10-3）でとりあげられて、その銘文に関して種々論ぜられたところであることを付け加えておきたい。

最後に竹内氏蔵鏡は、梅原氏の報告では三神五獸鏡とされ、樋口氏、西田守夫氏もこの鏡名を用いられている。しかし後藤守一氏は「漢式鏡」において「四區に分かれた内區は四神四獸を配する神獸鏡型式となつてゐるが、神像區の一は、一神一獸として稍々普通型を破つてゐる。四神四獸鏡の變形様式と見るべきであろう」として四神四獸鏡としておられる。これも銘文を有するが、銘帯の部分が大きく欠けており、銘文は一部しか見られない。梅原氏の報文では「吾明？鏡尊者？□山人……王高以赤□……□□□□名□□□昌？孫」とされ「是等の字句は普通の銘文に見る處と稍々異なるが如きを以て今ま類例を求めて全文を復原することは難し」と述べられている。ところが、樋口氏の「古鏡」や小林氏の帝塚山大学考古学研究室の記念講演会における要旨に付けられた「中国製三角縁神獸鏡の同範鏡の分有關係」表で、兵庫コヤダニ鏡、静岡平川大塚鏡との關係をあげ、その銘文についても「吾作明竟甚大工 上有王喬以赤松 師子天國其□龍 天下名好世無雙 □□□□壽□□」（右回）（小林氏の「古墳文化論考」所収論文におけるコヤダニ鏡、大塚鏡の銘文による）と述べられ、西田守夫氏は「三角縁神獸鏡の同範關係資料(三)」（ミュージアム第305号）で、竹内氏鏡についての所見を加えてこの銘文をさらに詳しく「吾作明竟甚大工 上有王喬以赤松 師子天鹿其舞龍 天下名好世無雙 照吾□竟壽如太山」と読まれている。これらによると竹内氏鏡の銘文は「王喬以赤□天國名□國吾□竟壽國太山」



となる。

## 9. 中主町中里古墳出土鏡

野洲郡史に「野洲郡中里村古墳は明治31年8月其発掘に際し獸形鏡1面、劍身、銅鈴1、管玉、白玉の若干、祝部土器及び馬具破片一括等を出してゐる。何れも東京帝室博物館の蔵となつてゐるが、其の古墳の状況を詳にすることが出来ないが、同村真宗佛光寺派掛所附屬山林に存在してあつたものである」と記されている。概要の記述もほぼこれと同様である。なおこの鏡は富岡謙蔵氏「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）に収載されている。古墳は中主町木部の水田の中にあり、所在地に「山林」とあるのは、地目が山林となっているためであろう。仿製の七獸鏡で、径10.3cmである。東京国立博物館に所蔵されている。

## 10. 守山市服部遺跡出土鏡

これは古墳出土鏡ではないが、古墳時代前期を示す遺構から出土しているので一応ここに述べることにする。服部遺跡については現在なお研究が続けられており、正式報告書は出されていないので、詳細はその報告を待つことにするが、大橋信弥氏は「服部遺跡発掘調査概報」が公刊されている。その中で山崎秀二、谷口徹両氏によって報告された「古墳時代の遺物」の中でこの鏡がとりあげられている。仿製の内行花文鏡で、径は7.8cmである。現在守山市の埋蔵文化財センターに保管されている。昭和51年9月発見。

## 甲賀郡の古鏡

### 1. 水口町泉塚の越古墳出土鏡

この古墳については、概要や甲賀郡志下巻で述べられているが、出土遺物についてはその出土が新しいのでなら触れられていない。昭和36年7月、古鏡、玉類、武器武具の残欠が出土した。なお墳丘からは埴輪破片も発見されている。出土遺物は現在水口町教育委員会により同町中央公民館に保管されているが、これは発見当初からではなく後に保管されたものである。鏡は内行花文鏡で、図録では舶載鏡径13cmとされている。（保管遺物に玉類は含まれていない。）

### 2. 水口町高山大路山古墳出土鏡

概要の高山古墳群の説明の中で「最も高い所にあつた円墳壘上より、昭和10年11月古鏡1面、勾玉1、管玉、小玉、刀劍破片等を拾得した。鏡は檜木片上に鈕を下にしてあつたもので、径3寸6分、縁厚1分3厘反り1分3厘の四獸鏡……」と述べられ、図版第19にこの鏡の写真が掲載されている。しかし現在では所在不明である。水口町の中西利弘氏の調査によれば、所有者が勧告に従って提出された由であるが、その勧告者や提出先は不明とのことであつた。写真から見ても仿製鏡と思われ、径は換算すると約10.9cmとなる。

## 蒲生郡・近江八幡市の古鏡

### 1. 竜王町薬師岩ヶ峰古墳出土鏡

近江蒲生郡志巻巻に「大字薬師にては岩ヶ峰の古墳は明治34年4月18日発掘せられ、勾玉5個と直刀及古鏡等を出し」とある。この岩ヶ峰古墳は遺跡目録に無く、名の似た古墳に岩屋古墳がある。しかしこれは岩ヶ峰古墳とは異なるようで、現在鏡出土古墳は不明である。鏡も現存していないようで、鏡に関する詳細は一切不明である。識者の教示を待つ。

### 2. 竜王町八重谷古墳出土鏡

概要に「蒲生郡鏡山村八重谷の埴輪を伴ふ一古墳より、嘗て大字山中村田八四郎氏が古鏡、管玉、琴柱形石製品を拾得した。古墳の形状は不明であるが、鏡はその後東京大学人類学教室の所有に帰したといふけれど文様不明」とある。そうして、琴柱形石製品と管玉については説明がなされている。この鏡に関しては、現存するか否かを含めて詳細は一切不明である。

### 3. 近江八幡市安養寺上野車塚古墳出土鏡

近江八幡市安養寺に所在した上野車塚古墳から明治45年2月に鉄刀、鉄鋏、鉄釘等と共に1面の鏡が出土したことが、近江蒲生郡志巻巻に述べられている。古鏡は現在住吉町の区有で、近江八幡市郷土資料館に保管されている。従来仿製の變形四獸鏡と考えられていたが（昭和55年度滋賀県遺跡目録でもそのように記載されている）田中琢氏の教示によれば、舶載の四禽鏡とすべきである。径は7.1cmを計る。ところが、この鏡の伴出遺物について留意すべき点があるので、大方の参考に資するため述べておきたい。前述の蒲生郡志に「桐原村安養寺上野の林中には三四個の古墳あり、明治28年発掘せし小字堂山の古墳よりは埴蓋杯高杯等を出す。又明治43年2月小字丸山の車塚より発掘せし遺物は大小の曲玉2個杏葉直刀等あり。同45年2月小字上野の車塚よりは直刀古鏡鉄鋏鉄釘等を出せり。鉄釘は木棺に用ひし釘なるべし（写真参照）」と述べられている。写真には「桐原村安養寺上野山丸山古墳遺品明治43年2月発掘」として写真があり、その下に「斧3埴1金属4曲玉3漢鏡1劍身完全1断片4」の説明がある。ところが、今日この鏡の伴出遺物として資料館に保管されているのは、勾玉1、金銅製帯金具5、鉄製石突1である。記事と写真と現存品とは一致しないようである。写真は記事の3古墳のうちの後の2古墳のもののように、現存の遺物を含んでいるが、それらの伴出関係は、郡志の記事から考えて不詳とすべきであろう。従って、現存の資料館の資料で古墳や鏡の性格を云々することは危険を伴うと言わざるを得ないと思われる。

（西田 弘）

以下次号につづく